

## 音楽発表会

毎年十一月にゆみ子の学校で行われている音楽発表会。クラスごとに歌を発表し、保護者だけでなく、たくさんの地いきの人も毎年楽しみにしている学校の一大行事である。

二学期の初め、ゆみ子のクラスでは、この音楽発表会でどんな歌を歌うのか、学級活動の時間に話し合いをすることになった。

「見に来てくれる人に喜んでもらうために、五年生はどんな歌を歌ったらいいと思いますか。」

と、司会者が言うと、ゆみ子は一番に手を挙げた。

「わたしは、今はやっている歌を歌ったらいいと思います。わけは、みんなが知っている歌だと聞いています。聞いてくれる人も楽しいと思うからです。」

「去年もみんなが知っている曲を歌ったら、いっしょに歌ってくれて、とても盛り上がったから、ぼくもはやりの歌がいいと思います。」

そのときだった。

「ちがう意見があります。」

と、なおみが手を挙げた。

「わたしは、藤井清水ふじい きよみさんの曲を歌ったらいいと思います。わけは、藤井清水さんは呉市くれ出身の大作曲家だし、わたしは夏休みに藤井清水童よう大会を見に行つて、藤井清水さんの曲にとても感動したからです。地いきの人にも、ぜひ藤井清水さんの曲を聞いてほしいです。」

(フジイキヨミ?)

「藤井清水ってどんな人ですか?」

ゆみ子が質問すると、なおみは、

「藤井清水さんは、呉市歌や呉小唄を作曲した人です。生がいで千九百曲もの曲を作った日本を代表する大作曲家です。」

と答えた。それを聞いたゆみ子は、強い口調で言った。

「見に来ている人の中に、藤井清水さんを知らない人もいると思うので、わたしはやっぱりはやっている歌を歌った方がいいと思います。」

結局、その時間の中では、歌が決まらなかった。

その日の帰り、校門を出ようとするとゆみ子になおみが近付いて来た。

「ゆみ子さん、藤井さんの曲だけどね……。」

そう話しかけられたゆみ子はなおみと目を合わせられず、急ぎ足で



帰って行った。

その日の夕方、家で夕食を食べる時、ゆみ子の機げんが悪そうな様子を見て、おばあちゃんが声をかけた。

「ゆみ子、どうしたんだい？」

「それがね、今日学校で、今度の音楽発表会でどんな歌を歌うか話し合ったんだけど、藤井清水っていう人の歌を歌いたいっていう意見が出て……。」

すると、話が終わらないうちにおばあちゃんが言った。

「藤井清水さんの曲？ なつかしいわ。たしか、焼山の人だよ。おばあちゃんが通っていた小学校の校歌も作った人だよ。」

「そうなの。」

「それにゆみ子もよく聞いているじゃないの。」

市民センターから朝、昼、晩と流れてるあのメロディーよ。」

「えっ、それなら知ってる。」

「ゆみ子、何の曲を歌うの？ おばあちゃんは『信田のやぶ』を小学校の時に歌ったことがあるよ。そうそう、こんなメロディーよ。」

『おせどのおせどのおせどのおせど……』とてもきれいなメロディーでねえ。わたしらの年代の者はね、歌っていると小学生の頃を思い出すのよ。また聞いてみたいわ。今年の音楽発表会、絶対に見に行くからね。」

ゆみ子は、はっとした。  
(そういえば昨日、帰りがけになおみさんが言いたかったことって何だったんだろう。)



次の日の学級活動の時間、話合いの続きをした。すると、ゆみ子があわてて手を挙げた。

「ごめんなさい。昨日は、はやりの曲を歌いたいと言ったけど、やっぱりなおみさんが言ったように藤井清水さんの曲の方がいいと思います。わけは、私は知らない人だったけど、メロディーは小さい頃からよく聞いていたんです。それなのに……。この小学校を卒業した人は私のおばあちゃんもふくめて、藤井さんの曲が流れると小学校時代をなつかしく思い出すのだそうです。だからみんなに聞いてもらう歌は藤井さんの曲がいいなって思うようになったんです。」

すると、どこからともなくはく手が起こり、あっという間に教室全体にその音が広がった。

話合いが終わった後、今度はゆみ子からなおみに近づいて、なおみに笑顔で話しかけた。